ふくりゅう

発行所　日本下水文化研究会運営委員会
発行責任者　谷口尚弘（運営委員会副代表）
発行年月日　平成９年１０月１５日
印刷所　(株)愛甲社
編集　小松建司　新澤紀昭
秋号（通巻９号）

’97　バルトン忌

～バルトンとのゆかりをもとめて～

平成9年8月5日（火）曇天の中、恒例のバルトン忌が開催された。集合場所の青山霊園管理事務所に集った15名の心は日本の上下水道功績者への敬意でひとつに結ばれていた。

案内役の栗田彰氏より手渡された資料は、実に簡にして要。墓参する功績者の足跡が容易にたどれる。また、巻末の青山霊園案内図で各功績者の墓所が一目で解るのも有り難い。しかも、今回の案内の主眼は“各功績者がバルトンとどの様なかかわりがあったのか”で行われ、実に意義深いものであった。

さて墓参は恒例のコース。磐梯山の噴火調査会でバルトンと同会したパーマーの墓参にはじまり、御存じバルトン編集の『日本の地震』に掲載されているスクリバ医師、仕事の上にとどまらずバルトンと深い友情で結ばれていた後藤新兵、バルトンとともに『上下水設計調査委員会』のメンバーであった長与専斎、バルトンが主任を務める『上下水設計調査委員会』の報告を受理した芳川顕正、そして最後はバルトン。スコットランド民謡『アメージンググレイス』の流れるなか一同による献花と黙祷が捧げられた。バルトンの墓前では稲場紀久雄氏より今年はバルトンの99回忌にあたる年であり、しかも来年の100回忌は東京の通水100年目にあたるとしでもあり日本の上下水道を考えるうえで原点を振り返り、新しい世紀に向けての展望を打ちだす年となるであろう、とのお話しがあった。しかし上下水道の心を同じくする者、必ずや先達は私たちに多くの示唆を与えてくれるに違いないであろう。

墓参の後は近くのレストランで昼食会。酸性雨の害など楽しい話題で時の経つのも忘れ、おもてを見れば、騎雨。足早に、職場あるいは帰路と解散をした。

森田　英樹

平成９年度第１回定例研究会記録

平成９年９月12日　６時30分
日本水道協会会議室

２題の講演の概要は次のとおりです。

１．酒井　彰　流通科学大学教授

「地域水環境管理システムの新たな枠組み構築の視点」

平成８年度末の全国下水道普及率は55％になった。

酒井氏は、家庭生活や都市活動、生産活動の有機物質は制御できるようになったが、さらに良質の水環境を創るためには新たな枠組みの構築が必要であることを強く主張された。そのために不可欠な「パラダイムシフト」を、次のように整理されました。

１．水循環システムと人との距離を再度近づける。住民の社会参加。
２．効率性のみの評価システムから脱却し、評価軸を多様化する。
３．資源利用と環境が相補関係をもつ水循環システムを構築する。
４．地域水循環をトータルな視点で捕える。施策相互の共同化。
５．広域の空間スケールでの影響を考慮する。適正規模な水循環規模。
６．柔軟に時間スケールに備える。更新、廃棄を含めた評価を行う。

「画一化」から「個性化」への転機に立って、水環境を保全するためになすべきことが如何に多いかを痛感いたしました。

２．森田英樹氏　聖徳大学付属中・高教諭

「江戸屎尿施肥攷
—佐藤信淵著『十字號糞培例』現代語訳を通じて—」

古代社会から現代にいたるまで、人と屎尿の付き合いは２度の転換点がみとめられる。すなわち、人口密度の低い古代社会では、“厠(川屋)”に示される自然の水洗便所によって投棄した。屎尿の肥料としての価値が生じたのは鎌倉時代であり、以来太平洋戦争直後まで化学肥料とともに利用されてきた。そして、下水道普及時代には、屎尿は再び処理・処分される存在になった。

森田氏の研究の主題は、肥料としての屎尿の使われ方であり、とくに「施肥の際、他の肥料との分量配分がどの程度であったか」を解明し、「農村における屎尿の需要量を正確に認識し」「都市と農村との屎尿流通過程を捕える」ことに絞り込まれている。

このたび現代語訳された佐藤信淵著「十字號糞培例」（1824）には、屎尿と他の肥料との配分などが学術的に記述され、貴重なデータを提供している。氏の古典文献への造詣の深さに驚嘆するとともに、今後の研究の進展を期待したい。

講演では、関西と関東で便所の構造が異なるのは屎尿の価値の差に由来することなどを、多くのスライドを用いて説明された。

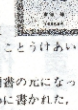
1997.９.30　福田記

マスコミ情報

新刊図書

◆歳時　下水道略史

渡辺　健・著



同書は、日本下水道協会の機関誌「下水道協会誌」に連載していた「下水道ミニ歳時記」をまとめたものである。時と場所を選ばず下水道に関するさまざまな事象・歴史をとりあげた同書を読めば、日本の下水道史がたちまちのうちに理解できることうけあいである。

著者自身も語っているが、同書の元になった連載は機関誌の余白を埋めるために書かれた、いわゆる「埋め草記事」と呼ばれるものであった。だが、その内容たるや、埋め草記事と呼ぶにはおこがましい秀逸なものである。名文の誉れ高いものは、意外にこのような限られた条件下のもと思案を重ねることで生まれるのかも知れない。そう思わずにはいられない一冊である。

また、同書は表題で「歳時」と謳っているが、内容はあくまでも下水道の歴史を綴ったものである。だが、目次を「睦月」「如月」「弥生」…と月ごとに分けるなどしており、歳時記的でユニークなつくりとなっている。

日本下水文化研究会・刊　A5判　280頁
頒価2,000円

「下水道史」に興味を抱かせる

『歳時　下水道略史』
日本下水文化研究会発行　渡辺　健著

著者の渡辺健氏は、東京都下水道局から日本下水道協会へ移り、「日本下水道史」全五巻の編集委員を務められた方です。

本書は、渡辺氏が「下水道協会誌」に連載した「下水道ミニ歳時記」を、日本下水文化研究会が刊行する下水文化叢書第4号のために、一冊の本にまとめたものです。

渡辺氏は非常に博識な方で、下水道史にも造詣が深く、本書は渡辺氏だからこそ書けたものだという思いがします。

歴史というと、年表の暗記をさせられた学校で教わる無味乾燥な歴史を思い起こしてしまいがちです。そのためか、事柄を通史的に見ていくことが歴史だと思われてしまいますが、その点、本書は歴史的な事柄の羅列ではなく、一つひとつの事柄を興味深い「お話」にしてくれています。

本書の題名にある「歳時」とは、本書の編集の仕方によるもので、明治から現代に至る下水道史上の事柄を、一月から十二月までの各月ごとに選別し、配列してあることによるものです。各月の扉ページには「日」「年」順に項目を並べ、その中からいくつかを選び出して、単なる通史ではなく、歴史を親しみ易い読み物にしてくれていますから、読者は自分の関心ある事柄を選んで読み進めれば良いわけです。

一例を示しますと、「八月」の扉ページには、

一日　昭和五〇年　日本下水道事業団発足
三日　昭和四二年　公害対策基本法施行
五日　明治三二年　W・K・バルトン死去
九日　昭和一三年　「下水道事務処理ニ関スル内務・厚生両省覚書」取り交わされる
一四日　昭和四五年　都市計画中央審議会、「下水道整備のための方策」を答申
二五日　昭和二年　中島博士記念日本水道史発刊
一六日　明治二一年　東京市区改正条例公布（明治二二年一月施行、我が国初の都市計画法制）
二〇日　明治一二年　虎列剌病予防仮規則を布達
二四日　昭和三九年　環境庁、東京の隅田川に関する水域指定と水質基準を告示
二七日　明治一〇年　虎列剌病予防心得を布達
二七日　昭和四〇年　第1次下水道整備及び終末処理場整備5ヵ年計画（昭和三八～四二年度）閣議決定
二七日　昭和四六年　第3次下水道整備5ヵ年計画閣議決定
昭和三三年　建設省、下水道整備緊急5ヵ年計画（昭和三四～三八年度）策定
昭和四五年　都市計画審議会に下水道部会設置

とあり、本書に記述されているものは、ゴシック体で標記されています。

「略史」というのは、著者の謙遜でしょう。記述内容からすれば「略史」でないことがわかります。

「バルトン死去」の項には、・下水道外国人技術者・バルトンの業績・東京市区改正について・内務省雇工師（顧問技師）として、の見出しを付けて三ページ半にわたって記述され、さらに、バルトンの訃報を伝える当時の毎日新聞（明治三二年八月九日付）の記事も紹介しています。

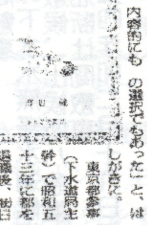
「中島博士記念日本水道史発刊」の項では、発刊の経緯、編集基本方針、構成が述べられ、そのあとに下水道に関係する項目が紹介されており、博士の小伝、年譜も載せています。この項の最後にある「この水道史は日本土木文化遺産調査会（土木学会）によって「近代土木遺産としての名著一〇〇選」に選定（昭和五五年）されている」といった記述をみても、本書が決して「略史」ではないと言えると思います。

本書はご希望の方には、実費（送料共）二千円で頒布しております。

（申込先　東京都下水道局流川処理場☎〇四二五（八一）九七八七　栗田）

本の紹介

歳時　下水道略史
渡辺健著・日本下水文化研究会刊



この三月まで五年半にわたり、日本下水道協会の機関誌「下水道協会誌」に連載された「下水道ミニ歳時記」が、下水文化叢書の一冊に生まれ変わった。

著者いわく「事項の配列に脈絡を欠き、内容的にも長短や濃淡がみられるが、目的の第一が「埋め草記事」としての掲載であり、第二に、標題の「歳時」が示すように年と時の折々に起きた事項をアラカルト的に取り上げたためである。これは貴重なページに「余白を出さない」とする編集の大義と「余白は埋めなければ」とする編集者としての苦衷の選択でもあった」と、謙虚さに。

東京都参事（下水道局主幹）で昭和五十三年に都を退職後、旧日本下水道協会で、平成二年まで参事兼下水道史編さん室長を務めた。さらに二年間は嘱託として、この協会誌と「下水道論文集」の編集に従事した。

編集者としての苦衷の道程で生まれたというが、過酷後も続けて欲しいという声に押され、今回、二百八十ページに及ぶ下水道の軌跡がたどれる本となった。

区部下水道普及百％を達成した今、改めてこの本を読むと、いかに長い道程であったかが分かる。慶応四（一八六八）年六月二十日にはR・H・ブラントンが灯台技師として政府の求めに応じて来日。日本に在留する最初の土木技術者として、専門以外の電信線、さらには下水道も手掛け、「横浜の下水・道路整備計画」をまとめ、衛生の普及にも貢献した。手記には「どんなものでも竹で造るこの国では、東京の近くに柔らかく、製陶に適した粘土があることはよく知られているのに、粘土を焼いて排水管を造り、地下に埋めることなど、かつて考えたこともなかったのである」とあっておもしろい。

公共下水道の最初の竣工といえるのは神田下水。当時、四度にわたるコレラの大発生があり、環境衛生が大きな課題となった。そして市内で最も不潔であった神田の一部に下水道が敷かれることになったという。

また、最も近い出来事は昭和四十六年十月二十五日の第一回日米下水道処理技術委員会の開幕。この席で、水質汚濁防止、下水の高度処理、汚泥の処理・処分、下水処理水の再利用などにかかわる技術と行政などが討議研究されることになったとあり、歩みを思い起こさせる。

下水道関係者だけでなく、下水道の恩恵に預かっている人も、折に触れてこの本をめくってみたい。

本書への問い合わせは、東京都流域下水道本部処理場・栗田氏まで。☎0422・[illegible]

江戸の下水川柳で紹介

'97.8.17 産経多摩版

都職員が解説書出版
「現代人が学ぶもの多い」

「江戸の下水道」を出版した栗田彰さん

江戸の下水道はロンドンやパリの下水道以上によく整備されていたといわれる。下水道が詠みこまれた当時の川柳などを引用しながら、人間くさく解説した「江戸の下水道」（青蛙房）がこのほど出版された。著者は都下水道局職員、栗田彰さん（六〇）。江戸の人々と下水道とのかかわりをみると、「いまの下水道はこのままでいいのだろうか」と栗田さんは憂う。来月十日は「下水道デー」。

「箱下水」は路面や両側面を石か木で作った下水路で、ふたもついている。「割下水」は隅田川あたりの武家屋敷の広い道の真ん中を流れる下水。川柳「献札の向こうへ細く割下水」は、大小を腰に差した武士が、割下水をはさんであいさつするさまを詠んでいる。

また雨水利用が最近関心を呼んでいるが、江戸ではちゃんと「雨落下水」が家の前に設けられ、雨垂れを受けて流していた。

ロンドンでテムズ川の汚染騒ぎがあったずっと以前の十七世紀半ば、江戸では至るところに下水路が通っており、「町中、大下水道溝（さらい）へ、ちりあくた銘々之所にて取り上げ、下水溝（とどこお）りなく流れ候様に仕るべく候事」などという「町触れ」がたびたび掲げられた。

奉行所も「下水御改め（検査）」に精を出し、幕府が直接管理した「公儀下水」もあった。

栗田さんは文京区生まれ。昭和三十一年に都庁に入り、三十六年から下水道局一筋。落語好きで江戸の町名や川、堀に興味を抱いて文献をあさるうち下水の調査も開始。「初め資料がなくて岡本綺堂の『半七捕物帳』などの『どぶ板』などから勉強しました」。

欧米の近代下水道が導入され、神田下水が竣工されて今年で百十三年。都内の普及率はほぼ一〇〇％に達した。しかし「汚いものは目の前からすぐ消してしまい、あとはいっさい知らぬですませる。いまの下水道で本当にいいのか。下水は決して万能ではないから赤潮が発生したりする」と栗田さんは嘆く。

住民が見えるところに下水路をつくり、下水とともに暮らした江戸から現代人が学ぶものは多いと、栗田さんは考える。

問い合わせは青蛙房03・3813・1597。

本の紹介

江戸の下水道
栗田彰著　青蛙房刊　2400円

[illegible]

江戸の下水道
栗田　彰著

[illegible]

「どぶ」に込めた先人の生活感

'97.[illegible] 読売新聞

[illegible]

=切り抜き=（9.8.29　朝日新聞）
「国内最古の水場遺構」

北海道伊達市の北黄金貝塚の発掘調査をしている伊達市教育委員会は二十八日、国内最古とみられる「水場遺構」が見つかったと発表した。縄文時代前期（五千五百年前）に造られた「石敷きの作業場」、縄文中期（四千五百年前）の「人工池」、水くみの「足場」から成る。縄文時代の水くみ場であり、調理場でもあった可能性がある。水場遺構は全国で約十例見つかっているが、いずれも縄文後期から晩期にかけてのもの。

「石敷きの作業場跡」は、水路右岸の湧水（ゆうすい）から五～十メートルの地地点で、こぶし大の火山れきや、破損した石皿などが敷き詰められていた。「人工池」は、水路の川幅を五㍍以上広げて造ったものとみられる。下流に水止めの「堰（せき）」が設けられていた、とみている。

《連載 二》

下水に関する江戸町触

一カ月に三度宛下水浚〔一六四八年三月一九日〕

覚

一度々被仰付候表浦之下水、当月廿五日を切、水滞なく浚可申候、但壱町之下角下水二くい打、ちりためいたし、壱ケ月二十日廿日晦日三度宛、片側之町中之者人足を出し、角のちりためさらへ可申候、角屋之者も右之日限町中人を廻しさらへさせ可申候、たかいに致油断、さらへ不申候ハヽ、可被申來候、廿五日より両御奉行所より御同心衆御出し候間、油断有間敷候事

慶安元年子三月十九日

※「表浦之下水」は表裏の下水。

「廿五日を切」は二十五日を期限に。

「片側之町」は町の片側が寺社地や武家地になっていて、町屋が片側だけにしかない町。普通は道路に面した両側の町屋で一つの町。

「角屋之者」は角屋敷の者で町役人が住んでいた。

下水へ家作り出し申間敷〔一六五〇年一一月一四日〕

覚

一表裏下水　家作り出し申間敷候、出候所ハ急度切こみ可申候、為其以上

慶安三年寅十一月十四日

道築き／下水浚／下水へ家作り出申間敷〔一六五一・二・一九〕

一町中道あしき所ハ浅草砂を敷、中高二作り可申候、勿論どろあくたにて築申間敷事

一表裏々の下水水無滞水通候様、町中申合浚可申候、裏の下水　家作り出申間敷候、出候所ハ急度切可申候、近日御奉行所より御検使被遣候間、油断仕間敷事

慶安四年卯二月十九日御触、町中連判

溝より外〔一六五四・二・二〇〕

一古かね見世其外不寄何、商売物溝より外出し候事堅御法度被仰付候、自今以後、違背之輩於有之ハ、当人ハ不及申、家主共二急度可被仰付候事、以上

承応三年午二月廿日

大下水浚・下水幅〔一六五五・二・一五〕

一町中表裏之大下水、滞無之様早々さらへ可申候、下水幅之儀、前々其町々より書上申候通可仕候、若つき出し候所候ハヽ早々仕直可申候、近日御改御奉行衆御出被成候間、少も無油断、前廉よりさらへ可申事

承応四年未二月十五日御触、町中連判

【お知らせ】

下水文化研究発表会が11月21日(金)にあります。また下水文化を見る会が11月22日(土)にあります。お申し込み締め切り日は、10月31日(金)までですので早めにお申し込みください。

本下水文化研究会連絡場所の変更

(社)全国上下水道コンサルタント協会の移転に伴い、当会の連絡先も下記のように変更になりました。当分の間、郵便物は回送されます。

〒106　東京都港区東麻布1－8－7
平和堂ビル別館3階
TEL　03-3584-0919(変更なし)

「ふくりゅう」では原稿を募集しています。身近な話題などでも結構ですので送ってください。又、「ふくりゅう」に対する意見等もどしどし送ってください。

〒135　東京都江東区東陽7－1－14
東京都下水道局東部第一管理事務所業務課　小松　建司

編集後記

最近は、インターネットとか、ホームページとかが流行しています。当会も流行を取り入れようかという話もありましたが、とりあえずは「ふくりゅう」を充実させようということで落ち着きました。

(建)

【訂正】

☆「下水文化研究」第9号の記事に誤りがありましたので、訂正させていただきます。151 ページ

『日本下水文化研究会　平成9年度予算』　収入の部

前年度繰越金　説明文

(誤)「前年度繰越金　871,000 円を含む」

(正)「前年度未払金　871,000 円を含む」

☆下水文化叢書第4号『歳時　下水道略史』につきましては、「正誤表」を「下水文化研究」第9号と同封させていただきました。

著者および読者のみなさまにお詫びし、訂正させていただきます。

【お知らせ】

第一回下水文化研究で使用されましたTEXTについて、残部が少しありますので下記にお申し込みください。又、森田氏から「便所の異名集覧」という冊子(50頁ほど)も限りがありますが提供いただいておりますので、同様にお申し込みください。

〒191　東京都日野市石田236
東京都下水道局浅川処理場内　栗田　彰

会員の方にお知らせいたします。最近郵便物が宛先不明で戻るケースが多くなりました。当会では、できるだけ新しい住所を調べて送りますが、住所等を変更した場合は、早めにお知らせください。又、前にもお知らせ致しましたが、3年以上会費が納入されない場合は、郵便物等の発送を見送りさせて頂きますので、会費納入を忘れていましたら、早めに納入いただく様にお願いいたします。